伊勢物語古註釈の研究

大津有一著

8N-372'
(07)
Or. 87

昭和二十九年三月二十日印刷
昭和二十九年三月三十日発行　定価金壱千円

著者　大津有一
金沢市大手町一番地

発行者　石川国文学会
代表者　窪田敏夫
金沢市高岡町九十番地

印刷者　明治印刷株式会社
代表者　飯尾龍三郎
金沢市片町五十六番地

発売所　宇都宮書店

伊勢物語古註釋の研究

序説

◇研究史の資料　◇きつの解釈　◇奥書は信用出来るか
◇比較について　◇時代区分

昭和九年の春であつた。私は国語と国文学の四月特別号に、それは十週年記念日本文学研究史上世編と銘うたれてゐたが、中世に於ける伊勢物語の研究といふ題を掲げて、小さい研究史を書いた。原稿八十枚程度のものであつたから、北村季吟の伊勢物語拾穂抄で筆を止めねばならなかつたが、その結びで、私もそのうちにもつと詳細なものを書きたいと思つてゐる旨を表明した。これは当時抱いてゐた希望をそのまま述べたわけであつたが、いはば一種の公約とでも云へる性質のものでもあつた。それ以来戦争中の数年間に亘る空白はあつたけれど、伊勢物語研究史の問題はいつも念頭を離れたことはなかつた。勢語諸伝本の調査にしろ、註釈書の整理にしろ、日記記録の渉猟にしろ、努めて怠らなかつた積りである。第二次世界大戦の末期、サイパンの失陥以後の我国は空襲によつて甚大な被害を受けた。古書の失はれたものはどれだけであつたか知れない。ところが戦後の経済変動の影響を受けて、従来学者の眼に触れたこともなかつた古写本が幾多市場に現れて、私達を驚かせたのである。伊勢物語の伝本でも、武田祐吉博士によつて紹介された泉州本以後、昭和二十三年十月刊行の図書寮典籍解題や、昭和二十四年五月の国語と国文学の田中宗作氏の谷森本伊勢物語についてによつて知られ、鈴木知太郎氏によつて昭和二十七年十一月活字にして古典文庫に改められた谷森本、一誠堂書店に出た伝為相筆本伊勢物語、書肆弘文荘から天理図書館に入つた伝為家筆本伊勢物語など珍しい本の出現をみた。殊に後の二本は何れも十五万円といふ売価を付けられてゐたものである。その他宇土細川家の旧蔵で、今は九州大学図書館の所有となつた伝為家

筆本、昭和二十五年十二月の高島屋の和洋古書大即売展に出品された伝為家筆本、昭和二十六年十月の白木屋の古書展のせられる本が相ついで出て来た。以上の外にも尚一二眼に触れた。室町以降の古写本に至つては、随分の数に上るのであるが、これらが何れも伊勢物語研究史の重要な資料であることは今更云ふまでもあるまい。本文校定の変遷や本文の伝来史を探ぐる上で、種々の新事実を教へてくれるのである。特に前記の泉州本・谷森本・伝為相筆本・伝為家筆本は、青谿書屋旧蔵の伝為氏筆本伊勢物語と共に、所謂異本伊勢物語として興味をひくものがある。

日記記録の類が研究史の資料として大切なものの一であることは、今更改めて説く必要もあるまい。故和田英松博士の皇室御撰之研究などには、日記類が十分に活用されてゐた。昭和二十八年一月発行した金沢大学法文学部論集文学篇の中で、私は日記記録の上から見た伊勢物語の研究といふ一文を草して、定家の日記明月記や飛鳥井雅有の日記嵯峨の通路などは普く人々の知るところだから別として、室町時代・江戸時代の日記を取上げて、それらが研究者の伝記とか、諸本の書写とか、講釈の日時や聞書の成立など、研究史上の種々の問題に対してかなり正確な指針を与へて呉れることを説いてんど立入つてゐないこと、闕けてゐる部分があつたり、書いてないことが多かつたりして、研究史の資料としては必ずしも第一に推されるべきものでないことなども記した。史籍年表は座右に置いて何年何月の日記にはどんなものが現存してゐるか、調査に甚だ便利ではあるが、秘庫にあつて容易にみられなかつたり、渉猟しても所期の効果が得られなかつたりすることも勿論多い。

研究史の資料として、中心になるのは何と云つても註釈書である。私も従来最も力を致したのは古註釈の蒐集と整理であつた。国文学の作品の中でも古来註釈の数の多いものとして、万葉集と古今集、伊勢物語と源氏物語がよく挙げられる。それにもう一つ入れるなら徒然草がある。国文学研究史の大部分を占めるのが、万葉・古今・伊勢・源氏の研究史である。伊勢物語の註釈は、明治以降のものを除いたいはば古註釈だけを数へてみても、一体どれくらのあるであらうか。これまで出た書籍解題の類を若干列挙して、それぞれの書名を比較してみると、

国書解題	考証伊勢物語詳解	日本文学書目解説(一)	日本文学大辞典
*伊勢物語髄脳	伊勢物語髄脳	*伊勢物語髄脳　伝在原滋春	伊勢物語髄脳
*伊勢物語知顕抄	伊勢物語知顕抄（続群書類従本）	*伊勢物語朱雀院髄脳	
*伊勢物語抄		和歌知顕集	伊勢物語知顕集
伊勢物語註	同　見聞書抄	*伊勢物語抄　伝源経信	伊勢物語抄
	伊勢物語註（津軽家蔵）	*伊勢物語見聞書抄	
*伊勢物語愚見抄	伊勢物語註（東京帝国大学蔵）		伊勢物語註
*伊勢物語宗祇抄	同　塗籠抄	*伊勢物語塗籠抄	
	同　愚見抄	*伊勢物語愚見抄　一条兼良	*伊勢物語愚見抄
	同　宗祇抄	*伊勢物語山口抄　種玉庵宗祇	*伊勢物語宗祇抄
	伊勢物語聞書		
	同　肖柏宗祇校作		
伊勢物語肖聞抄	同　肖聞抄	*伊勢物語肖聞抄　牡丹花肖柏	*伊勢物語肖聞抄
	同　宗長抄	*伊勢物語鈔　宗歓	伊勢物語肖聞抄

伊勢物語直解	直解	西三条実隆
*伊勢物語惟清抄	同 惟清抄	環翠軒宗尤
伊勢物語抄	同 紹巴抄	逍遥院談義称名院聞書
伊勢物語聞書	伊勢物語聞書	西三条実隆談義聞書
*伊勢物語難義註	同 難義註	藤原堯慶
	同 道増抄	聖護院准后
	同 恵雲院抄	近衛関白前久
*伊勢物語闕疑抄	同 闕疑抄	細川幽斎
	伊勢物語嬰児抄	
*伊勢物語集註	同 伊勢物語抄	後陽成院天皇
	同 集註	釈切臨
伊勢物語抒海	同 抒海	釈了意

*伊勢物語御抄	*伊勢物語直解	舟橋宣賢
	*伊勢物語惟清抄	
	*伊勢物語紹巴抄	里村紹巴
	*伊勢物語聞書	
	*伊勢物語口訣	
	*伊勢物語七箇秘伝	
	伊勢物語難義註	
	*伊勢物語闕疑抄	細川幽斎
	伊勢物語嬰児抄	
	伊勢物語寡聞抄	
	伊勢物語得意抄	後陽成天皇
	*伊勢物語愚按抄	
*伊勢物語集註	*伊勢物語集註	和田以悦
*伊勢物語抒海	*伊勢物語抒海	了意

伊勢物語惟清抄	
伊勢物語難義註	
*伊勢物語闕疑抄	
嬰児抄	
伊勢物語抄	
伊勢物語集註	

伊勢物語聞書	同 勅講抄	後水尾院天皇
同 勅講抄	同 聴書稿本	仙洞御講釈
*伊勢物語初冠	伊勢物語初冠	加藤槃斎
伊勢物語盤斎抄	伊勢物語槃斎抄	
同 新抄	同 新抄	
同 奥旨秘書	勢語玄旨	
伊勢物語註絵入	同 頭書抄	
伊勢物語秘訣抄	同 秘訣抄	高田宗賢
*伊勢物語拾穂抄	同 拾穂抄	北村季吟
伊勢物語言余抄		
絵入新版伊勢物語	同 増選抄	
伊勢物語口訣抄	同 絵抄	
*勢語臆断	同 口訣抄	僧興隆
*勢語臆断別勘		
*伊勢物語童子問	同 童子問	荷田春満
*伊勢物語童子問修删	伊勢物語童子問修删	度会末雅

*伊勢物語御抄		
闕疑抄初冠	加藤盤斎	
*伊勢物語新抄		
伊勢物語頭書抄		
*伊勢物語秘訣抄	高田宗賢	
*伊勢物語拾穂抄	北村季吟	
伊勢物語増選抄		
伊勢物語口訣抄	興隆	
*勢語臆断	契沖	
*勢語臆断別勘	伊勢貞丈	
*伊勢物語童子問	荷田春満	
*伊勢物語童子問修删	渡会末雅	

伊勢物語勅講抄	
伊勢物語初冠	
伊勢物語註絵入	
*伊勢物語拾穂抄	
*勢語臆断	
伊勢物語別勘	
伊勢物語童子問	
同 修删	

伊勢物語章甫抄	伊勢物語章甫抄
伊勢物語審注	同　審註
伊勢物語諸註参解	同　諸註参解
伊勢物語傍註	同　傍註
伊勢物語古意	同　古意
伊勢物語古意校	よしやあしや
伊勢物語古意追考	同　古意追考
伊勢物語図説抄	勢語図説抄
伊勢物語新考	同　新考
伊勢物語残考	同　残考
伊勢物語図会	同　図会
伊勢物語梓弓	同　梓弓

伊勢物語日脚	伊勢物語日脚
伊勢物語清渚抄	同　清渚抄
伊勢物語通	勢語通
伊勢物語章甫抄	伊勢物語章甫抄
伊勢物語審註	同　審註
伊勢物語諸註参解	同　諸註参解
旧本伊勢物語考	伊勢物語傍註
伊勢物語傍註	同　傍註
伊勢物語古意	同　古意
よしやあしや	同　古意追考
勢語図説抄	勢語図説抄
伊勢物語新考	同　新考
伊勢物語残考	同　残考
伊勢物語図絵	同　図会
伊勢物語梓弓	同　梓弓

辻　経定	辻　経定
五井純禎	五井純禎
岨山春幸	岨山春幸
高宮環中	賀茂季鷹著
賀茂季鷹著	松尾与清手沢本
松尾与清手沢本	賀茂季鷹著
賀茂季鷹著	竹内直躬校合本
竹内直躬校合本	上田秋成
上田秋成	建部綾足
建部綾足	斎藤彦麿
斎藤彦麿	近江覚勝寺
近江覚勝寺	玄常弟海量
玄常弟海量	春雨亭
春雨亭	市岡猛彦校
市岡猛彦校	平田篤胤
平田篤胤	

伊勢物語日脚	辻　経定
伊勢物語清渚抄	五井純禎
勢語通	岨山春幸
伊勢物語浮橋抄	谷川士清
伊勢物語章甫抄	賀茂季鷹
伊勢物語審註	上田秋成
伊勢物語諸註参解	斎藤彦麿
旧本伊勢物語考	海量
伊勢物語傍註	似雲
伊勢物語古意	平田篤胤
勢語考	
よしやあしや	
勢語図説抄	
伊勢物語残考	
校訂伊勢物語図絵	
伊勢物語梓弓	

伊勢物語難語序	伊勢物語難語序
参考伊勢物語	同　難語抄
伊勢物語添註	参考伊勢物語
伊勢物語新釈	屋代弘賢
伊勢物語箋	清水浜臣書入本
同　題号考	同　披雲
伊勢物語註抄	同　爪櫛
同　初冠	添註伊勢物語俚言解
同　読本抄	清水浜臣
同　密議	佐佐木弘綱
伊勢物語難語序	五十嵐篤好
屋代弘賢	伊勢物語添註
伊勢物語添註	清水浜臣
伊勢物語新釈	藤井高尚
伊勢物語箋	橘守部
伊勢物語昨非抄	立綱
伊勢物語題号考	
伊勢物語披雲	五十嵐篤好
伊勢物語俚言解	佐佐木弘綱
在五中将日記復古解	野々口隆正
伊勢物語歌伝	
伊勢物語標柱	

伊勢物語添註	大和詩経解
伊勢物語新釈	表章伊勢日記附証
伊勢物語箋	

伊勢物語詞百韻	
伊勢物語抜歌	
同　系図	

これは明かに誤植と認められるもの、例へば国書解題の伊勢物語濤註は伊勢物語添註といふやうに訂正を加へて置いたが、考証伊勢物語詳解の伊勢物語聞書慶長刊は肖聞抄の刊本、槃斎抄と新抄は同一のもの、勢語臆断・伊勢物語新釈などは註釈書の項で挙げるのを忘れたものかと思はれるけれど、その儘にして置いた。また全部とまでいかないが、かなり順序は変更して年代順に近いものに改めてみた。特に印を付けたのは解説のあるものである。この書名だけをみても、明治・大正・昭和と註釈書の調査の行はれて来たことが理解されるであらう。然しこれとて古註釈の全部を尽してゐるわけではない。現在残つてゐる数に比べれば、九牛の一毛といふ譬はあたらないが、何分の一かも知れぬ。殊に和歌知顕集と云つても種々の異本があり、肖聞抄とあつても数多くの伝本があつたりするので、それらの一々に当るとなると、それこそ古註釈の数は夥しいものとなるのである。しかも和歌知顕集なら和歌知顕集に三種類あつて、それに末書ともみられるものが幾つかあるといふやうなことが、単に古註釈の研究者の好奇心を満たすだけでなく、伊勢物語註釈史の上に大きく関係してくるやうな事実すらあるのである。

例へば伊勢物語の第十四段に、

夜もあけばきつにはめなでくだかけのまだきになきてなせをやりつる

といふ歌があるが、このきつの解釈で一番古いのは清輔の奥義抄である。即ち

きつとはきつねなり。かけとは鶏也。くだとは家をいふとぞ、ものしれりし人は申侍る。しかとさしぬにやともよみて、又いへのとりといはんことかゝ。もしくだはくづといへるにや。五音の字也。くづにはとりとよめるにやともきこゆ。

とある。これは奥義抄の板本をとつたため、中程に意味不明の箇所があるが、泉州本伊勢物語にはこの歌の次に、

奥義抄云、わがやどのきつにはめなで、きつとはきつねなり。かけにはとりなり。くだとは家をいふとぞ、物しれりし人は申侍しかど、はじめにはやどゝいひて、又家のといはむことかゝ。もしくだはくづといへるにや。五音の字也。くづにはとりとよめるにやときこゆ。

と奥義抄を引いてゐる。これによれば意味がよく通る。かやうにきつを狐と解釈してゐるのである。ところが和歌知顕集では、例へば三条西家本をみると、

一鳥、夜もあけばきつにはめなでくだかけのまだきになきてせなをやりつるといへり。この哥はなにとよめるぞ、おぼつかなし。風、きつとはきつねなり。はめなでとはくはせんとなり。くだとは家也。かけとはにはとりなり。宅鶏とかきてくだかけといへり。家のにはとりなれば、きつねにくはせんといふなるべし。まだきとは、まだしきなり。せなとはおとこなり。ちぎるおとことかけり。されば、あけばわがいろのにはとりきつねにくらはせてん、まだ夜もあけぬになきて、ちぎる男をかへしたればといふなり。又ある物には、みちのくにのならひとして、木船をきつとなづけたり。人などをかんだうするには、この木船のおもきをふて、それがしたにこめていましむるをきつにはむるといふぞといふ人も侍れども、万葉にきつねといふ字をきつとよませたり。そのうへにはとりはきつねのこのみてくらふものなれば、これにくはせんといへるはあひかなひて侍べり。ふねかづけてにはとりかんだうせんとは、よりどころなくおぼえ侍り。

とあつて、狐説を採つてゐるが、一説として木船説を持出してゐる。神風知顕正義集にはまた、

よもあけばきつにはめなでくだかけのまだきになきてせなをやりつる。

これもかみのごとく古哥をいれたるなり。万葉集に、きつねといふ字をきつとよませたり。又云、みちの国にはふねのをもきをしきをきて、人をかんだうするにはそのふねのしたにいれてわびしむるなり。かのふねをきつ船と云也。はめてとは、人をはむるといふかのくにの風俗也といえり。或云、昔は庭鳥をさとのきじとて、船にすしにしてくひけるとかなんど申せども、此義おぼつかなく侍り。さるべしともおぼえず。たゞきつにくらはせでと心うべし。くだとは、宅鶏とかきてくだかけとよむ也。或又、祭時くだといふ物を付なんどこれを云。まだきとはまだしき也。せなとは、契夫とかけり。又男女ともかけり。

とあつて、大体和歌知顕集の云ふのと同じい。ところが架蔵の伊勢物語註には、

きつと云は狐也。庭鳥の夜ふかく鳴て男をかへすに、夜あけたらば狐にくはせてと云なり。家隆にはきつとは馬船を云也。あづまことば也。くだかけと云は鶏也。此は天智天皇の四関のほらへの時、会坂にてには鳥にはらへつけ、しでをつけ、くさりつけてはらはるゝ也。くだかけともゆふつけ鳥とも云也。四関とは須磨龍田鈴香会坂也。せなと云は夫とかけり。万葉云、梅花夫賀家佐枝 包 奈良間可宜 人毛無登紫良哉。

図書寮本の伊勢物語抄もまた

きつと云は狐也。哥の心は庭鳥の夜ふかく鳴て男をかへすに、夜明ば狐にくわせばやといふなり。故にきつにはめなでと云。又家隆にはきつとはむま舟を云。されば夜明たらば、此庭鳥を馬舟にうちはめてをかでと云。むま舟をきつといふはあづまことば也。くだかけとは鶏なり。これは天智天皇の四境の祓の時、相坂にて鶏にくだをかけてはなち給へり。仍くだかけと云。四境とは会坂須磨龍田鈴香是なり。家隆云、くだかけとはちいさき家の鶏と云。くだとは少の義也。くだけたるといふ意也。くはいへ、けは鶏也。此義不レ然也。唯くだをきりかけたる故にくだかけといふなり。行家にはひよくのたくを聞てよめりと云。くだかけとは小鶏也。小鶏と書てくだかけとよめり。鶏はかけとなけばくだかけといふ鶏といへり。たうりうには不レ然。又云家顕路鳥といへり。鶏鳴て家の路あらはるゝと云。

とあつて両者共狐説だが、きつを馬船といふのは家隆の説だとして挙げてゐる。かやうに和歌知顕集とか神風知顕正義集とか、伊勢物語註とか伊勢物語抄とか、略鎌倉時代に既に出来てゐたやうな註釈では、きつを木船とか馬船とかいふ説を挙げてゐたのである。しかしそれ以後の註釈では、かうした説は全く影をひそめて了つた。ところが江戸時代の末になつて、きつを水槽とする考が、前記の諸註釈からでなく、東北方言から暗示を得て発生して来た。最初に此説を提示したのは、平田篤胤であり、完成したのは伴信友であつた。その経緯は信友の随筆比古婆衣の十一の巻に精しく出てゐる。即ち平田篤胤が話に、おのれが生土の出羽の秋田わたりにて、太き丸木を鑿て作れる水槽をキッといひて人家の門に居置て、常の用ひ水とするところあり。老人に問ふに、此キッむかしはおほかた家毎に門に居置くならひなりつるが、近きころやうやく大瓶などを用ふる事となり、又其をだに置かぬ家も多くなりて、今はキッある家はまれなれば、其名だに知らぬ人はたおほかめりといへり。これ古き東語にて、きつにはめなでの歌は、もしくは鶏をそのキッてふ器の水中にうちはめむといへるにはあらじかといへり。

と述べ、

おのれ又後に、秋田人高階貞房に問ふに、もはら篤胤の云へるに同じ。猶その後おくの国人に問ひ試るに、有り無し知りしらずとり〴〵なる中に、所によりては尋常のごとく板にて合せ造れるをキッといふともいへり。キッは木樋の約りたる言なるべし。キもヒも共にイの韻ある言なれば、ヒを省きていはむ事ことに例多し。板に造れるをいふは名の転れるなり。予さきに下野の二荒路にても家の門に板にて造れる水槽を居置たるを見あたりて、其名をとふに水ためにてさふらふといらへて、はかばかしき名はきこえざりき。こはいと希しき説なるにつきてなほ考ふるに、今も鶏の宵鳴するを凶みてしかさせじとするには、その鶏の腹をしば〳〵水に漬し冷せば、その事止むものなり。また雌鶏の卵を孚さむとて塒に在を、止させむとするにも然すれば止むるものなり。そは腹の熱をさます術なりとぞ。宵鳴を止むるも同じことわりなるべし。女その鶏のまだしも宵鳴せむことを悪嫌て、明旦きつの水に打没入むといへるなり。

と云つて、結局

一首の意は、夜明なばキッの水にうち入なまし、腐鶏よ。汝が宵鳴したるを暁がたぞとおもひて、まだ夜ふかきに夫を帰しやりつるがくやしく悲しきよ。またの夜よりはしか宵鳴はせさせじとなり。

としてゐる。信友の伊勢物語中の難語の解釈の草稿を平田篤胤を介して見たのは、屋代弘賢であつた。文化十年に出来た参考伊勢物語の奥で、

さてきつにとは、万葉集にも狐にといふべきをきつにとよめることあれば、誰も狐のことゝおもへど、さにあらず。みちのくにゝてきつといふは水槽のことなり。竹ともしき所ゆへ家ごとに槽を造りて、水をたくはふるなり。この事南部津軽の人にたしかにきけり。それをきつとしもいふは木地櫃の中略にてもあるべきにや。くたかけとは、栗本千夏が説にくたとは朽腐の義なり。此歌ひなび

てきつにはめなでなどよめるからに、鶏を罵てくたれかけといひしなるべしといへり。くだらかけの中略といひ、又家をくだといふ説などもも信じがたし。もしくだらかけとよむべくば、誰もよむべきに此歌より外にみえざれば、さにはあらざるべし。さて一首の意は、鶏の宵なきせしを夜のあくるかとおもひて、男のかへりし故にその宵なきを止めん為に、水槽にひたさんといへるなり。鶏のむねを水にひやせば宵なきせずといふことも、ひたすことをはめるといふ詞も今現にあるならはしなり。

と全く弘賢自身の考へた説のやうに書いてゐる。又文化十二年に出版した藤井高尚の伊勢物語新釈は、文化初年に信友の草稿をみたことがあるので、

さて又立入信友宇は伴州五郎と云人の江戸よりいひおこせけるは、此哥は鶏の宵鳴といふ事したるをまことの暁ぞとこゝろえて、男のかへりたるあとにてよみたる哥ときこゆ。夜ふかく出にければといへると哥の意とを考へ合すべし。さて哥の意きつは吾友平田篤胤がもの語に、己がうまれし国の出羽の秋田のあたりにては、木もてつくれる大なる箱を家々にすゑおきて、水を蓄ふる器とせり。其器の名をきつといふ。老人のものがたりに此きつ昔はおしなべて家ごとにありしものなりといへるが、ちかき比は大かた瓶を用ふる事となりて、きつをすゑおく家は少く、其名を知るものも多からず。これ古き東語にて、きつにはめなんの哥は、鶏をきつと云器の水中へうちはめんといへる成べしといへり。こはいとめづらしき証ある考なるにつきてなほ考るに、今も鶏の宵鳴するをにくみて、しかさせじとするには鶏の腹を水にひたし冷せば、其事止むもの也。そは腹の熱をさます術なりとぞ。はめなんは水に投るゝ事なり。はめははませにて、すべてものゝ中へこなたより入る事をいふ詞にて、今水中へ物を投るゝをもはめはむるなど云是也。女此鶏の又宵鳴せん事をにくみきらひてしかせんといへる也。くたかけのくたは腐にて、鶏をふかく悪みてのゝしりたる言也。此哥をおきて鶏をくたかけといへることときこえず。一首の意は、夜あけなばきつにうちはめなん、腐鶏よ。汝が宵鳴せしゆゑに暁ぞとおもひて、夫をかへしやりつるがくやしく悲しき事、かされてしか宵鳴はせさせじといへる也といひおこせき。いとめづらしき説にぞありける。

かやうに書いてゐる。篤胤・信友・弘賢・高尚の四人の中篤胤は別としても弘賢のやうに、伊勢物語では朱雀院塗籠御本や為家卿本や時頼本など種々の異本をみてゐた学者が、和歌知顕集・神風知顕正義集・伊勢物語註などの説を挙げなかつたのは不思議である。私の調査したところでは、和歌知顕集には三条西家本の系統の本と、保坂氏蔵本とそれから続類従本系の諸本と三種の種類がある。これらの中で続類従本の系統の諸本だけが第九段から第十六段までの註釈を欠いてゐる。従つて弘賢などの使つた知顕集は続類従本の系統で第十四段の註がなく、木船説を知らなかつたのである。昭和になつてから再びこの水槽説を持出したのは小林好日であつた。これも東北方言の調査から出たもので、国語と国文学第十九巻第九号の語源学と方言語彙学に発表された。

又同じ伊勢物語の「夜もあけばきつにはめなんくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」のキツは、古くは狐の意味に解した。東北地方の北部では水槽である。肥料溜や糞溜にもつかはれる。秋田県では風呂桶をフロキチと云ふ所もある。キツを水槽と解したのは平田篤胤で、翁が秋田の人であつたからである。之を篤胤は伴信友に伝へたので、信友はその随筆比古婆衣の中に録した。ハメルも方言にあるが、これも古くからあつたもので、万葉集十の巻に「うぐひすの鳴くくらたにうちはめて焼けは死ぬとも君をし待たむ」、土佐日記の「ほと〳〵うちはめぬべし」の類である。

キツは又古今著聞集の巻三公事の条に「三条左大臣入道の内弁の時、さつにとりてめし給ひたりけるを、識者のし給ふことなれば、やうぞ侍らむとや思はれけん、諸人みな同じ物を食せられけり」とあるが、「さつ」は「きつ」であらう。元禄三年刊行の流布板本にも異本きつとある。このごろの活版本に「さき」となつてゐるのは濫に改めたものに違ひない。古今著聞集のころには椀の如きものを指したか分らない。山形県では今日木を刳り抜いた盆のやうなものや木製の副食物入れを云ひ、福島県では同じ木製でも銭箱を云つたりしてゐる。もと木で作つた箱の水溜のやうなものからかう云ふものにその名の移ることは多く有り得ることである。

これも勿論和歌知顕集や伊勢物語註などとは関係なく、方言語彙学から生れたのである。石川県でも右の山形県の例のやうに、木をくり抜いて作つた椀の大きなものをキヂと云つてゐた。矢張キツから来たものであらう。かやうにきつの水槽

説は、平田篤胤や小林好日を待つまでもなく、すでに鎌倉時代から存在したのであつた。然しそれが一条兼良によつて排斥された和歌知顕集、殊に三条西家本系統の諸本にだけ載つてゐることや、勿論保坂潤治氏蔵本にもあるかと推測されるが、それから神風知顕正義集・伊勢物語註など割合に稀覯の本に挙げられてゐたため、自然に学者の注目をひかなかつたかと思はれる。屋代弘賢にしても不忍文庫には伊勢物語関係の書物を多く集めてゐた。静嘉堂文庫所蔵の不忍文庫書目から拾つてみても、真名伊勢物語古写、塗籠本、伊勢物語永正四年宗全奥書、小本同古写本、大本伊勢物語紹巴奥書、同為相卿筆古摸輪池奥書有、伊勢物語姉小路済継朝臣筆、同実相院殿増運真跡、同順覚筆、同水無瀬、同塗籠御本摸書、同古筆摸本吐屠庵奥書、同古写本正徹花押、同童子問、勢語末書、伊勢道遙院再抄、同惟清抄、同愚賢抄、参考伊勢物語、山口記、伊勢物語聞書、同抄、同私記河津祐章記、同偽書、同物語校本、同添註、伊勢物語朱雀院塗籠御本、阿古根口伝、伊勢物語朱雀院髄脳、同髄脳、勢語臆断別勘、よしやあしや、知顕抄、肖聞抄也足本慶長嵯峨本、伊勢拾穂抄、闕疑抄うゐ冠、真名伊勢物語、伊勢物語也足本嵯峨板などある。これらの中で阿波国文庫へ入つたものもかなりあつた。知顕抄と題したのは一部だけで、徳島光慶図書館でみたが、続類従本系統であつた。弘賢の難語序の引用によつても、彼の所持した知顕は続類従本系統で、三条西家本の系統はみてゐなかつたらしい。従つてきつの水槽説が和歌知顕集に載つてゐることを知らなかつたと思はれる。かやうに註釈史の上に知顕の諸本の調査が関聯してくる。神風知顕正義集・伊勢物語註を見てゐるかゐないかが解釈に大きく関係してくるのである。

奥書とか識語とか称せられてゐるものは、果して信用していゝものかどうか。これは仲々問題である。といふのは信用出来るものもあれば、全くの偽跋の場合もあるからである。どれが本当でどれが偽物かといふ判定は多くの例を比較してみないと分らない。例へば、桃園文庫蔵法橋玄津筆本伊勢物語と某所蔵伊勢物語と伊勢物語板本とを比較してみると、

法橋玄津筆伊勢物語	某所蔵伊勢物語	伊勢物語板本
右書本者為二定家卿自筆一禁レ裏御本也。随レ有レ縁申出為二処証一本、不レ違二一字一点一令二透写一遂二再校一訖。雖レ然魯魚之誤猶難レ遁者歟。于時長禄第二暦仲陽初三候記レ之。 執筆法橋玄津(花押) 此本定家卿之以自筆写書校合之上者尤証本無レ疑者也。 休止正徹(花押)	右書本者為二定家卿自筆一禁レ裏御本也。随レ有レ縁申出為二処証一本、不レ違二一字一点一令二透写一遂二再校一訖。雖レ然魯魚之誤猶難レ遁者歟。 休止正徹在判	右書本者為二定家卿自筆一禁レ裏御本也。随レ有レ縁申出為二処証一本、不レ違二一字一点一令二透写一遂二再校一訖。雖レ然魯魚之誤猶難レ遁者歟。于時長禄第二暦仲陽初三候記也。此本定家卿之以二自筆一写書校合之上一者尤証本無レ疑者也。 桑門堯空在判

これなどは法橋玄津筆本が転写されたり、または版行されたりしたために、執筆法橋玄津とか休止正徹とか記されてゐた署名が略されたので、いつしか偽跋のやうな形になつて行つたわけである。

かやうに奥書も転々する中に色々変化する場合がある。署名が違つて行く程ではなくても、多少字句に相違が生じてくることがある。例へば朱雀院の塗籠に業平自筆と云はれた伊勢物語のあつたことは、一条範兼の和歌童蒙抄や顕昭の古今集註の述べたところであるし、伝為氏筆本伊勢物語や泉州本伊勢物語にも載せてゐる。即ち

和歌童蒙抄	古今集註	伝為氏筆本	泉州本
業平ガテヅカラカミヤガミニカケル伊勢物語ノ朱雀院ノヌ	又業平ガテヅカラカミヤガミニカケル伊勢物語ノ朱雀院ノ	業平自筆にかやがみにかきたる本、朱雀院のぬりご	業平自筆にかやがみにかきたる本、朱雀院のぬりごめ

リゴメニアリケルニハ、只右近ノ馬場ノ日、ムカヒニタテリケル女ノカホ、シタスダレヨリホノカニミエケレバトゾカケリケル。サレバ日ヲリノヒトカキアヤマテルニヤ。	ヌリゴメニアリケルニハ、タヾ右近ノ馬場ノ日、ムカヒニタテリケル女ノカホ、シタスダレヨリホノカニミエケレバトゾカケル。サレバヒヲリノ日トハカキアヤマテルニヤ。	めにありける伊勢物語にもてつがひの日とぞありける。古今には ひをりのひとある如何。	にありける伊勢物語にもてつがひの日とぞありける。古今には ひをりの日とあるいかゞ。	

これをみると、和歌童蒙抄と古今集註のいふのが略同じく、伝為氏筆本と泉州本の所記が略同一である。平安朝の末期に於いて業平自筆と称せられ、朱雀院の塗籠にあつたといふ本が存在したことは右の記述から知られるが、その本の奥書かと思はれるものも現在幾つか残つてゐる。伝為氏筆本伊勢物語は或本奥書云、或本云として二つを挙げてゐるし、泉州本・神宮文庫本・谷森本など何れも同様の奥書を備へてゐる。然しこの五つの奥書を比較対照してみると、泉州本・神宮文庫本・谷森本の三者は略同一のものであるが、伝為氏筆本所載の一つは小異があり、他の一つは著しく違つてゐる。即ち

伝為氏筆本伊勢物語	泉州本伊勢物語	神宮文庫本伊勢物語	谷森本伊勢物語
或本奥書云 この本は朱雀院のぬりごめにかやがみにかきてありしをてづからときゝしかばかきうつし	この本は朱雀院のぬりごめに紙屋がみにかきてありしをみづからのときゝしかばかきうつ	此本は朱雀院の塗籠にかやがみにかきてありしをてづからのと聞しかば書写たる。高二位	この本は朱雀院のぬりごめにかやがみにかきてありしをてづからのときゝしかばかきうつ
或本云 此朱雀院のぬりごめにかやがみにかきてありけるをてづからときゝしかばかきうつし	この本は朱雀院のぬりごめに紙屋がみにかきてありけるをみづからのときゝしかばかきうつ		
ばかきうつしたるとかうの二位のかくはかきたる。此本はかう二位のいゑのとぞきゝはべるとぞ。	したる。高二位のいゑの注にもかくぞかきたるとあれど、またかの業平の身づからのてしてかきたる本はことにぞあるをかきそへたり。又みあれの内侍のかきたるもあり。おぼろげならぬ本どもなり。	の家の注にもかくぞかきたるとあれど、又彼の業平のみづからの手してかきたる本はことにぞあるをかきそへたり。又みあれの内侍がかきたるもあり。おぼろげならぬ本どもなり。	したる。高二位のいゑの注にもかくぞかきたるとあれど、又かのなりひらのみづからのてしてかきたる本はことにぞあるをかきそへたり。又みあれの内侍がゝきたるもあり。おぼろげならぬ本どもなり。
たる。高二位の家住にも高二位のつけたるなるべしとて本にとあれど、またかの業平みづからのてしてかきたる本はことにぞあるをかきそへたり。またみあれのないしがゝきたるもあり。おぼろげならぬ本とあり。			

かういふ差異はどこから生じて来たか。書写の際の単なる誤と考へていいかどうか。勿論次の二つの奥書などは、

伝為氏筆本伊勢物語	伝為相筆本伊勢物語
顕輔卿本にて所書写也。件本は大外記師安本也。小式部内侍自筆之由所注也。雖然不審事件本に合書付也。和哥二百五首。其後以或証本合此校了。件両本次第無相違。三宮御本云々。仍付其等也。自此下物語は他本合有事等を追書入一也。皇太后宮越後本云々。	書本云、顕輔卿本にて所書写也。件本は大外記師安本也。小式部内侍自筆之由所注也。雖然不審事件本に合書付也。和哥二百五首。其後以或証本合比校了。又以或一本校了。件両本次第無相違。三宮御本云々。仍付其等也。自此下物語は他本合有事追書入一也。 本云、建久元年八月六日於安部山門書了。 以皇后宮越後本所書写也云々。

右に示したやうに、一誠堂書店にあつた伝為相筆本伊勢物語の方は書本云の三字が書かれてゐたり、本云として皇后宮越後本を書写した旨を加へてゐるのに反して、青谿書屋旧蔵の伝為氏筆本伊勢物語では、書本云がなく、本云建久元年云々の代りに只皇太后宮越後本云々とだけあつて、稍省略した書方になつてゐるが、他は辞句の末まで大体一致してゐるので、これはもと同一のものであつたのを、伝為氏筆本が省略したかと考へられる。かやうに元来は同じ奥書であつても、転々書写されて行く中に所謂魯魚の誤で、処々字句に相違が生じることは、屢々見られるところである。

例へば九州大学図書館所蔵の伝為家筆の伊勢物語は、元来宇土の細川家に伝来したものであるが、所謂定家の流布本の奥書を持つてゐる。ところが徳島光慶図書館所蔵の順覚本伊勢物語の奥書と比較してみると、かなり字句に相違する点が知られる。即ち

宇土細川家旧蔵本伊勢物語	阿波文庫旧蔵本伊勢物語
抑伊勢物語根源古人説々不同。或云、在原中将自記也。因茲有其謙退比興之詞等。又云、伊勢筆作也。或云、未年十三而書之。似彼家集之文体。是故号伊勢物語云々。以此両説案之、更難決其実否。或心中秘密身上興言、外人推而難記。以之思之可謂其自書歟。但疑万葉之古風之中多載撰集之哥。仁和聖日之間、粗記臨幸之儀、依此等事又有不審。又伊勢家集其端文躰偏以同之。是又見先達旧記庶幾其体歟。両不知之。加之此物語名字非彼筆者何称伊勢哉。或説云、為狩使下向伊勢。仍有此名云々。其説又不可然。始則載南京春日之詞、次又注西対夜月之思。富士山之雪、武蔵野之煙、凡非伊勢国事。多以為此物語之肝心。仍此名尤有不審。両条已推而難決。古事只仰而可信。因茲後人以狩使事出此物語之端。其本殊狼籍左道者也。更不可用之。只以旧本可為証拠耳。先年所書之本為人被借失。仍為備証本重所校合也。	抑伊勢物語根源古人説々不同。或云、在原中将自記之。因茲有其嫌退比興之詞等。又云、伊勢筆作也。或云、生年十三幼書之。似彼家集文躰。是故号伊勢物語。以此両説案之、更難決之。心中秘密身上興言、他人推而難注之。以之思之可謂其自書歟。但疑万葉古風之中多載撰集之哥。仁和聖日之間、粗記臨幸之儀、此等事又有不審。伊勢家集其端文躰偏以同之。是又見先達旧記。庶幾其躰歟。両不知之。加之此物語名字非彼筆者何称伊勢哉。或説云、為狩使下向伊勢。仍有此名。其説又難信。始則載南京春日之詞、次又注西対夜月之思。富士山之雪、武蔵野之煙、凡非伊勢国事。多以為此物語之肝心。仍両説共有不審。古事只仰而可信。又或説云、後人以狩使事改為此草子之端。更不用之。為叶伊勢物語之道理也。件本狼籍奇怪者也。伊行所行也。不可用之。先年所書之本為人被借失。仍為証本重所校合也。
戸部尚書在判	戸部尚書在判
定家卿	此本非常本之躰。古本根源殊可庶幾。仍書写了。秘蔵物也。後日可清書者也。
此本非常本躰。古本殊所庶幾。仍書写之。	寛元四年丙午三月廿八日勘注了。明教
秘蔵物也。	相伝本為人被借失之間、遂得彼同本所書写也。于時文永九年十二月十二日記之。定円
	暦応四年十一月一日書写了。是則依藤井殿令誂以所持之本急速所馳老筆也。眼暗而弥散々歟。頽齢七十四。西方行人順覚

この阿波国文庫蔵順覚本伊勢物語の奥書の中、明教・定円・順覚の分は嘗て国語と国文学昭和九年四月号の中世に於ける伊勢物語の研究で紹介して置いたが、戦災で焼失した本であるから、ここに挙げたのである。圏点は仮りに私が附けてみたので、両本の相違するところを示したまでである。かやうに同じ奥書でもこれだけの差異が転写の際に出て来るといふことを考慮せねばならぬ。

ところがその相違がかなり甚だしくなつて来ると、誤写でもつて片付けられぬ場合がある。例へば伝為氏筆本伊勢物語の識語と天理図書館所蔵の伝為家筆本伊勢物語のそれとを比較してみると、

伝為氏筆本伊勢物語	伝為家筆本伊勢物語
私云、此物語諸本不同、員数不定、次第相違、其中殊違両本也。 一様は初春日野若紫哥、終昨日今日とはおもはざりしを云々。 奥書朱雀院本と注は大様此本也。 一様は初君やこしの哥、終に忘なよほどは雲居にの哥也。 此本は小式部内侍自筆之由大外記師安語侍之本也。伊勢物語号依斎宮事初挙、その哥尤可レ然云々。但不レ可レ然歟。又件本は世不レ普歟。可二秘蔵一云々。 以二顕照阿闍梨并皇太后宮越後本一所二書写一云々。	奥書に朱雀院の本と注は大様此本也。但付二此本一哥員在二多少一歟。 一様初に 君やこしわれや行けんおぼつかなゆめかうつゝかねてかさめてか。 終に わするなよ程は雲井になりぬともそら行月のめぐりあふまで。 此本者大外記師安先年持二参三条左京兆之許一、小式部内侍自筆云々。斎宮御事為二株事一、故立二伊勢号一仍以二此事一立始也 又此本にとりて哥数次第等多少不レ定歟。 或説云、伊勢十三歳之時相合在中将。閑後物語追注二置之一。仍号二伊勢物語一云々。但嵯考年紀可レ考二羊化歟。

これは伝為家筆本の方にかなりの誤写があるので、三条左京兆なども当然六条左京兆となくてはならぬところであるが、それにしても両者が同じ識語をそれぞれ転写して、これだけの差異が出来たものかどうか。小式部内侍筆と称せられた伊勢物語が大外記師安から顕輔に伝へられたことは、顕昭が古今集註で述べてゐるところである。即ち

又コノ斎宮ノコトヲムネトカクユヘニ伊勢物語トナヅクルコトハ、大外記師安ガ顕輔卿之許ニ来テ申侍シ此定也。其上伊勢物語一本モテ来テ侍キ。小式部内侍ガ書写也。普通ノ本ニハ、春日野ノ若紫ノ摺衣トイフ歌ヲコソハジメニハカキハベルニ、此ハ証本ニテ、此君ヤコシ我ヤユキケムノ歌ヲハジメニカケル、伊勢物語トナヅクルユヘトゾ申侍シ。

と云つてゐる。中原師安と藤原顕輔との交渉は、例へば清輔の袋草紙に、

和歌ハ好テ有二無益一事。大江公資大外記所望者也。僉議之時、諸卿皆是拝任官之由、而小野宮右大臣云、懐抱相摸一シテ秀歌案之間、公事闕如歟云々。諸卿解レ頤。依レ此突不二拝任一云々。

とあるが、この話を顕輔に語つたのは師安だといふ。顕昭の詞華集註によれば、ゆふぐれはまたれしものをの歌に、

是ハ大江公資ニワスラレテ相摸ガヨメル哥也。公資大外記所望有也。僉議時、諸卿皆定レ可二拝任一之由一、而小野宮右大臣云、懐抱二相摸一案二秀哥一之間、公事闕如歟。万人解レ頤。依二此詞一不レ任云々。是主計頭師安之物語也。詞華集撰之時、参二故顕輔卿之許一語二此事一。然者一道者可二用意一事也。而師安已為二大外記一。於二今者雖一レ入二撰集一、何為二其妨一乎云々。

と加へてゐる。これらによつて二者の関係もよく分るから、伝為氏筆本の云ふやうに私云以下の識語は顕昭本にあつたものであらう。従つて伝為家筆本のものも前半を欠してゐるが、内容を見れば矢張顕昭の所記を転写したかと思はれる。然し両者の相違は誤写だけで説明し得るであらうか。どちらか一方が改作したといふことも考へ得るし、また顕昭が小式部内侍筆本を少くとも二回は書写して、その際の識語にそれぞれ差異があつたかとも考へられる。

かういふ風に考へてくると、奥書とか識語とかいつたものでも簡単に信用するわけにはいかない。真偽を識別するのは実は容易なことではない。それではどうするか。本書ではなるだけ類本を渉猟して、多くのものを比較する方法を取つたのである。註釈書の方の例を二三挙げてみると、例へば架蔵の伊勢物語註は三冊あつて、一つは青谿書屋旧蔵の零本、二は伊勢物語註冷泉流と内題のある本、三は伊勢物語註解と外題のある本であるが、その奥書を比較してみると、

伊勢物語註零本	伊勢物語註冷泉流	伊勢物語註解
本云、 于レ時正応四年四月十九日、 定家之余風相伝如レ右	定家之余風相伝如レ右	ナシ

かやうに年月日を省略したものと全部奥書を略して了つたものとがある。また後水尾院の明暦二年の講釈の聞書の中にも、例へば和田英松の皇室御撰之研究に挙げられた同博士旧蔵本・宮内庁書陵部蔵伊勢物語聞書・弘文荘待賈書目第廿二号所載の伊勢物語後水尾院抄・刈谷図書館所蔵の勅講抄などを比べてみると、

和田博士旧蔵本	伊勢物語聞書	後水尾院抄	勅講抄
飛鳥井一位以二秘本一拝写之。	此飛鳥井一位秘本拝写之。 正徳四年甲午七月十六日初、八月七日於二簡黙亭一随得書終。	飛鳥井一位以二秘本一拝写之。 寛保四年十一月廿六日　度会常彰	以二飛鳥井一位之秘本一写レ之。 元禄十四年辛巳卯月十六日　埴宜堂

ここにいふ飛鳥井一位は飛鳥井大納言雅章であらうが、雅章の秘本を写したのは誰か。この四つの奥書を対照すると、俄かに誰と決定するわけにはいかない。元禄十四年・正徳四年・寛保四年などは明暦二年から夫々四十五年・五十八年・八十九年と距つてゐる。従つて埴宜堂・随得・常彰などの奥書の何れかを省略して和田博士旧蔵本の奥書が出来たと考へるべきか、それとも飛鳥井一位云々の奥書ある本を三者が夫々書写したと考へた方が適当か。恐らく後者であらう。かうしたことは比較対照してみなくては容易に結論は出て来ない。それにしても最初に雅章の秘本を写したのは誰であつたかは不明である。以上は唯奥書だけを比較したかのやうな印象を与へるかも知れぬが、実際は本文の対校を経た上での話なのである。前に挙げた泉州本・神宮文庫本・谷森本の三本は何れも略同様の奥書をもつてゐるけれど、本文を詳細に亘つて比べると、勿論そこに若干の相違がある。殊に何れもの巻末の数段を比較してみると、

泉州本	神宮文庫本	谷森本
111 下紐	111 下紐	111 下紐
112 須磨の蜑	112 須磨の蜑	112 須磨の蜑
113 やもめにてゐて	113 やもめにてゐて	113 やもめにてゐて
115 おきの井都島	88 あぢきなし月をもめでじ	88 あぢきなし月をもめでじ
116 小島の浜楸	120 筑摩の祭	120 筑摩の祭
117 住吉行幸	121 梅壺	121 梅壺
○ 大原やせかゐの水	122 井手の玉水	122 井手の玉水
◎ 心をぞわりなきものと	123 深草にすみける女	123 深草にすみける女
114 芹川行幸	124 思ふ事いはでぞ	124 思ふ事いはでぞ
△ 我家は雲井の峯し	125 終焉	125 終焉
△ 中空に立ちゐる雲の	117 住吉行幸	117 住吉行幸
△ 今はとて我に時雨の	115 おきの井都島	115 おきの井都島
△ 春の日のいたりいたらぬ	116 小島の浜楸	116 小島の浜楸
30 あふ事は玉の緒ばかり	○ 大原やせかゐの水	○ 大原やせかゐの水
28 玉蔓はふきあまた	◎ 心をぞわりなきものと	◎ 心をぞわりなきものと
118 △ 小夜ふけてなかはたけゆく	114 芹川行幸	114 芹川行幸
△ 月しあれば明けむ物とは	119 かたみ	119 かたみ

119	かたみ	△	いざ桜散らば散りなむ
120	筑摩の祭	△	思ひつゝぬればや人の
121	梅壺	△	秋の夜も名のみなりけり
122	井手の玉水	△	筑紫よりこゝまでくれど
123	深草にすみける女	△	かしがまし野もせにすだく
124	思ふ事いはでぞ	△	我宿にまきし撫子
125	終焉	△	夕月夜あかつきがたの

右の表の数字は定家本の章段の数字、○◎は泉州本と神宮文庫本・谷森本の何れにもある段、△は泉州本だけか、神宮文庫本・谷森本だけにある段を意味してゐる。又章段の表し方は伊勢物語詳解に拠つたが、それにない章段は歌の初め二句を取つた。かやうに同じ奥書を持つた本でありながら、神宮文庫本と谷森本とは勿論同一系統と認められるが、この両者と泉州本との間には右に示したやうな相違が出来てゐるのは何と説明したらいいのか。殊に神宮文庫本と谷森本とは異本との校合も殆どなく、註もないのに対して、泉州本はそれがかなりあつて、しかも伝為氏筆本と一致するものが多い。従つて泉州本と伝為氏筆本との関係は興味の深い問題である。それは兎も角として私はここで唯奥書が同一だからと云つて、必ずしも内容が同一だと判断出来ないことを注意したいと思つたのである。註釈書の方で云ふなら惟清抄の奥書を備へてゐるから凡て惟清抄だと速断出来ないのである。例へば内閣文庫の惟清抄は外題にもさうあるし、宜賢の序や惟清抄の奥書もあるが、惟清抄そのものではなく、肖聞抄・惟清抄・称名院抄・定家本勘物などを挙げた諸註集成である。また宮内庁書陵部所蔵の伊勢物語抄も宜賢の漢文の序や発空の奥書を持つてゐて、それだけみると惟清抄かと思はれるが、元の外題に惟清抄としてその下に二行に、同肖問注抄已紹ノ註とあるやうに肖聞抄・惟清抄・紹巴抄などの諸註の集成である。従つて本書で取上げた方法は原理としては至極簡単な比較に過ぎないが、実際に於ては広く諸本を求めて一々比較対照するといふかなり煩雑な手続を選んだ。そして問題によつては資料の少い場合、必ずしも解決を急がずに後考を待つことにして置いた。

本書は元来研究史の資料としての古註釈の解説を主としてゐるので、註釈史としての時代区分など或は無用のことかも知れぬ。然し成立年代の考証も多少試みてゐるから一応私見を記して置かう。嘗て私は中世に於ける伊勢物語の研究を大きく二つに分け、平安末期から室町初期までと室町中期から江戸初期までに区分した。これはその時は江戸初期までを扱つたためさうした分け方をしたのであつたが、註釈の上から云ふと、髄脳の時代、古註の時代、旧註の時代、新註の時代ぐらゐにしたらとも思ふ。髄脳の時代といふのは平安末期鎌倉初期をさすので、和歌の髄脳即ち歌学書に伊勢物語中の難語が註釈されたり、髄脳といふ名を付けた註釈が行はれたりしたところから名付けてみたのである。古註の時代とは鎌倉中期から室町初期までを意味するので、所謂古註が書かれたり、古註を主として講釈されたりしたのである。この二つは髄脳古註の時代と一つにみた方がより実際的かも知れぬ。旧註の時代は室町中期の愚見抄以後江戸初期までのことで、二条当流が中心となつてゐた。新註の時代は江戸中期末期で、契沖の勢語臆断からである。国学者と称せられた人々の勢語註釈が主流となつたのである。勿論かうした時代区分といふものは便宜的なものであつて、室町中期以後でも古註を以て講釈する場合があつたし、江戸末期になつても宮中では伊勢物語伝授が依然として行はれてゐた。従つて以上は極めて大ざつぱな摑み方で、実際は互に入りまじつてゐるのであるから明瞭に線を引いて此処から此処までは何といふ風に出来ないものであることはいふまでもない。

ここまでしか写さなかつたが、註釈はどういふ風であつたか記憶にない。多分焼失したことと思はれる。何人の註釈か全く不明である。

第四七　勢語得意鈔

◇勢語得意鈔とは　◇桃園文庫蔵本

勢語得意鈔は上中下三冊から成り、真名本・知顕抄・愚見抄・肖聞抄・惟清抄・闕疑抄・拾穂抄・勢語臆断・童子問・古意・勢語新釈などをもつて註を加へたものである。桃園文庫に三冊本が蔵せられてゐたが、精査の機会を得なかつたので、今存否を知らぬ。

第四八　石原正明の勢語章句

◇勢語章句は未見

石原正明は通称喜左衛門、号を蓬堂と云つた。宝暦十年尾張国海部郡神守駅に生れた。寛政四年本居宣長の名古屋に到つた時、その門に入り、後江戸に出て塙保己一に従ひ、群書類従の編纂に携つた。文政四年正月七日名古屋で歿した。六十二歳。

国学者伝記集成は彼の著述の中に勢語章句九を挙げてゐるが、どういふものか、私はまだ見てゐない。

第四九　尾崎雅嘉の伊勢物語鄙言

◇伊勢物語鄙言は未見

尾崎雅嘉は宝暦五年大阪に生れた。通称は俊蔵、号は蘿月庵・華陽・春の屋・博古知今堂などある。初め医を業としたが、後学者として立ち、著述が多い。文政十年十月三日歿。享年七十三。

国学者伝記集成はこの雅嘉の著として伊勢物語鄙言を挙げてゐるが、どのやうな註釈か、私はまだ見てゐない。

第五〇　平田篤胤の伊勢物語梓弓

◇きつは水槽といふ説　◇伊勢物語梓弓　◇上野図書館蔵本

平田篤胤は大和田氏、安永五年八月二十四日秋田下谷地町に生れた。通称は初め正吉、後に半兵衛、大壑・気吹之舎と号した。廿歳江戸に出て刻苦勉学したが、廿五歳の折板倉侯の臣平田家の養子となつた。宣長歿後の門人に列したのは有名な話である。晩年は秋田に帰り、天保十四年閏九月十一日に歿した。享年六十八。

伊勢物語第十四段の夜も明けばの歌の中のきつを狐としないで、水槽とみたのは彼平田篤胤であつた。この篤胤説によつて伴信友がこの歌の解を考へ、それをまた屋代弘賢・藤井高尚が採つたことは、序説ですでに述べた。

彼の伊勢物語の註釈には伊勢物語梓弓があるが、平田篤胤全集二に載せてゐるのを見ると、第六段までしかない。今巻

頭を示すと、

> むかしをとこうひかうぶりして奈良の京春日の里にしるよししてかりにいにけり むかしとは、たゞに過にしかたをひろくいへるにて、文の発端を、かやうに書出すことは、からやまとの書におほかることにて、尚書といふ漢籍の序にも、古者伏義氏王二天下一也、とかき出たるなどこれなり。（以上臆断によりていへり）むかしといふにて、しばしよみ切るやうによむべし、といふ説あり。古意にいはく、此説よろし。
>
> 男とは、業平みづからの事にて、わざとむかしの、或男といひなされたるなり。さるは此ふみよ、大かたは、男女のみそか事の多く、ことにその世にしては、憚るべき事のおほかれば、（二条の后との事、また伊勢の斎内親王を姦せしことのたぐひ）この頃の人の、たゞありにて、男女のかたらひせし事などは、さらにつゝむ事なかりし心にも、（此ころの人々の、みそかごとをつゝまざりしこと、総論にいへり）しかすがに、つゝましう思はれし故にぞあらん

かやうに割合に簡単なもので、主として臆断と古意を挙げ、中には伊勢貞丈・本居宣長などの説も掲げてゐる。宣長の説は勿論玉かつまである。今篤胤の考説を一二拾つてみるならば、

> 篤胤云、おひつぎてをやがての心なりといへるはかなへれど、俗に只今まゐらんといふ心を追付まいらんといふ如く、と云りしはいかゞあらん。おひつぎては追続てにて、則やがての心なるべし。さればきをにごりてよむべきにや。
>
> 篤胤云、いひいでそむる心にはあるまじ。ついたちよりといへるにて、逢て語らへるなる事しるきをや。

といふ風である。これはおひつきて、物をいひてなどの臆断の解釈に対して、自説を述べたのである。

上野図書館蔵本は神田秀夫氏の調査によれば、縦二十六糎半横十九糎の一冊。毎半葉十行に書いて四十八枚ある。四十四枚裏に四行文の余白があるが、臆断の文を写すつもりであけて置いたかと思はれる。奥に細字で、

> 文久二年五月七日御稿本比校畢。

とある。

第五一　磯田平庵の伊勢物語書入

◇岡田稔氏の解説　◇書入は未見

磯田平庵は尾張愛知郡万町村に生れた。名は玉秋と云ひ、荻園と号した。本居宣長の教を受け、和歌を善くした。後江戸に出たが歿年不詳。嘉永三年以後明治維新以前と推定されてゐるだけである。

隠れたる国学者磯田平庵と其の遺著を国語と国文学昭和五年六月号に寄せたのは岡田稔氏である。これによると、天保九年平庵は病中の徒然に、寛文二年板の絵入新板伊勢物語二冊に、契沖の勢語臆断の説を朱で傍註し、宣長の説を墨で頭註し、更に他説を墨で傍註したといふ。私はまだこの書入本を見てはゐないので、他説が何と何であるかを明らかに出来ない。

第五二　松田直兄の伊勢物語余言

◇伊勢物語題号考　◇伊勢物語余言は未見

松田直兄は天明三年に生れた。藤園と号し、賀茂季鷹の門人である。賀茂の県主で、正四位下伊予守に叙任せられ、歌文共によくした。嘉永七年二月二十一日歿。享年七十二。

伊勢物語題号考は美濃版一冊、天保十五年八月の賀茂県主重誠の序がある。伊勢物語の伊勢は令笑の義で、傍から見るといみじう令笑、こよなうあへしれ、やさしういひしれて、えもいひしらず面白きえせ物語の意とした。十行整版である。